

若狭湾東部沿岸地域における観光地化とその現状(昭和60年度卒業論文要旨)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5302

若狭湾東部沿岸地域における観光地化とその現状

谷 英 治

若狭湾東部沿岸地域は、自然的観光資源依存型の夏季一季型観光地域であり、宿泊施設面からは、民宿の卓越する民宿地域である。本研究においては、以上のような特色の著しい高浜町を事例として、その観光地化の過程、及び現状について考察を行った。

高浜町における観光の萌芽は、明治時代末期、避暑客の到来に対応し、貸間の機会が発生したことに端を発する。さらに、大正時代初期、京都師範学校の来訪以降、臨海学校が盛況となり、ここに観光は、実質的な開始をみることとなった。

大正11(1922)年、敦舞線(現・小浜線)が全通し、交通条件の改善がなされるとともに、高浜の観光は大きな転機を迎えた。これ以降、地元においても、先覚者の登場、観光関連諸団体の結成、観光施設の設置に端的に示される、観光地化への対応が活発化した。そして、このような動向のなか、高浜は長期避暑滞在客主体の観光地として、確立をみたのである。しかし、まもなく日華事変の勃発を始めとし、戦時体制への移行がみられるとともに、観光地化への動きは、沈静化の途を迎えることとなった。

第二次世界大戦後、高浜では、いち早く観光客数の増加がみられ、すでに昭和25(1950)年、15万人を超過する観光客数のあったことが知られる。さらに、観光地として、より一層の発展を迎える条件も整備された。一つは、昭和30(1955)年2月、1町3村(高浜町、和田村、青郷村、内浦村)の合併による、現・高浜町の成立に伴う、観光協会の統合・一本化である。そして、もう一つは、昭和30(1955)年6月、若狭湾沿岸地域一帯が、国定公園の指定を受けたことである。

1960年代以降、全国的には、観光需要の増大に伴い、観光の大量化、広域化、多様化の形態で現れてきた、観光の構造的変化が進展した。高浜町においても、昭和35(1960)年、日本海側最初の国民宿舎が建設され、ここにおいて、高浜町の観光は、画期を迎えることとなった。すなわちこれは、戦後、高浜町における最初の本格的な公的観光開発として位置付けられ、観光地化の推進において先鞭をつける性格を有していたのである。国民宿舎は以後、二度に渡り増改築がなされ、また、昭和57(1982)年には、県営和田マリーナの完成をみている。

一方、戦前の貸間業に替り、観光地化の進展に大きな役割を担った民宿は、昭和30年代後半に至り、その数を急激に増加させた。昭和40年代に入り、民宿分布は高浜町沿岸全域に拡大し、観光地化の進展が、より一層顕著な状況となっている。

以上のように高浜町では、地元行政体をも含めた、地元主体・地元主導型の観光地化が、戦前・戦後を通じ、一貫して推進されてきた。なお、このような事情の背景には、海水浴主体の観光形態の特性と、それに伴う顕著な季節性により、外来観光資本の流入が制約されたことが関連するものと考えられよう。

ところで、近年においては、観光客数の停滞傾向、昭和53(1978)年をピークとして以降の宿泊客数の漸減傾向が、明らかとなっている。そしてこのことは、従来、観光地化の主要な担い手であった民宿に、少なからぬ影響を与えている。すなわち一方では、民宿数における減少として、また他方では、一部の民宿にみられる施設面での質向上を図る動きとして、その影響が現れているのである。

現在においても、顕著な夏季一季型の観光地としての特色には変化がみられず、また、観光開発においても、依然、地域行政体が主導となっている。高浜町においては、公共資本主導型の観光開発を主軸として、通年型観光地を指向しつつある。だが、現時点においては、十分な成果は上がっていない状況にあるものといえよう。